2019年度　帰国隊員/青年支援プロジェクト　実施報告書		提出日 2020年　6月　25日
氏名：大谷　可菜子	実施国：ガーナ	調査研究

活動名称	ガーナにおける伝統医療の位置づけと受診行動に関する質的調査
実施期間	2019年　11月　1日　～　2020年　3月　31日

（1）申請した動機

感染症・エイズ対策隊員としての活動を通して、ガーナでは伝統医療が根強く残っていることを実感しました。その中には、ハーブ療法や、祈祷などのスピリチュアルなものがあり、年齢層や地域によって、さまざまな考え方がありました。ガーナでは、マラリアや結核、下痢症など、感染症が大きな問題となっていますが、感染症対策を実施するにあたり、現地の人々の考え方や、状況を踏まえて考えていくことが非常に重要です。

帰国後は大学院に復学し、質的調査を用いて、フィリピンにおける小児呼吸器感染症での受診行動に関して調査する機会がありました。ここでも、伝統医療の存在が受診行動に大きく関わっていることを改めて感じ、ガーナでの現状をより良く理解したいと考えるようになりました。ガーナ赴任中から現在まで NGO 活動を続けていますが、今後現地で保健医療分野の活動を広めていく計画もあり、地域の人々の医療に対する考え方を知りたいということも、申請理由の一つです。

（2）活動内容概要

2019年12月と2020年2月にガーナへ渡航し、ボルタ州内の隣接する２つの地域、サウスダイ郡とノースダイ郡で調査を実施しました。調査対象は、5歳未満の子どもを持つ母親（または身近で世話をしている人）とし、過去３週間以内にその子どもが体調不良であったことを条件としました。

合計25人に対して質問票と会話でインタビューを実施しました。病気になった場合の選択肢として、主に、ガーナ保健サービス（GHS）が提供する医療、ハーブ療法、伝統医療、薬局等の利用があります。選択の際に影響を与える因子として、１）経験や知識に基づく各選択肢に対する考え（ポジティブなイメージ、ネガティブなイメージ）、２）対象が子どもであるということ、３）金銭的問題、の３つがあげられます。この他にも、症状の種類や、重症度も影響を与えていると考えられました。現地の方々と共有した報告書を別添いたします。

（3）活動の成果・苦労した点・反省点等

子どもであるということが、受診行動、特にハーブの使用や伝統医療の受診を踏みとどまる要因となっているということが明らかになったことが、今回の調査での一番の成果であると考えています。祈祷など、スピリチュアルな分野に関してももっと深く知りたかったのですが、今回調査対象とした地域ではあまり一般的ではなく、ハーブ療法を中心とした調査となりました。伝統医療は地域差も大きく、一般化することは難しいと改めて感じたと同時に、それ故に、各地域での現状を把握しながら、感染症対策に反映していく必要性も感じました。

調査終盤には、ガーナでも新型コロナウイルスの流行が拡大してしまい、十分に現地スタッフとディスカッションを行う余裕がなかったことが残念でした。渡航が可能となったら、改めて今回のデータを用いて、現地の医療関係者と意見交換を行うとともに、感染症に対象を絞っての意識調査を行いたいと考えています。子どもだけではなく、研究対象の年齢層を大人に広げることも、今後長引くと予想される新型コロナウイルス感染症対策においては必要な調査ではないかと感じています。

（4）今後のプラン
今回の調査によって、多くの母親はGHSの医療機関とハーブ療法の両方を利用しているということがわかりました。受診が必要なレベルであってもハーブ療法を優先してしまうような事例もみられ、保健局での啓発活動の重要性を改めて感じ、今後のNGO活動の一つとしてもより積極的に進めていきたいと考えています。一方で、金銭的な理由から、必要性をわかっていながら医療機関を受診しない人たちに対しては、啓発活動のみでは解決できません。コミュニティでの相互補助の仕組みや、収入源になるような雇用の機会を増やしていくことが必要であり、この解決には保健局のみでなく郡全体で取り組んでいく必要があると思いました。新型コロナウイルスの流行により、感染症に関する情報があふれ、これまでの考え方に影響を与えている可能性もあります。年齢層によっても受診行動は大きく違うということも分かったため、調査対象を変えて調査を続けていきたいと考えています。